書評

鯖江市史　第五巻

藩政史料編II
鯖江藩御家人帳(上)

舟沢茂樹

福井県下で市町村史ブームといわれるようになって既に久しいが、最近の傾向として良質の史料編が刊行されるようになり、その内容も一段と充実したものになってきた。『小浜市史　社寺文書編』（昭五一）や『敦賀市史　史料編一』（昭五二）はその適例ともいえるものだが、このたびさらに『鯖江市史五　藩政史料編』がこれに仲間入りした。

鯖江市民会館に旧鯖江藩主間部家文書が収蔵されていることは周知のことだが、この文書中に家臣団に関する貴重な史料が豊富に残されている。士分クラスでは『御家人帳』（十四冊）がそれで、宝永元年より明治三年にいたる四百八十家の歴代当主の勤務歴が克明に記録されている。鯖江藩祖間部詮房が家宣（五代将軍綱吉の養嗣子）に従って西ノ丸入りしたのが宝永元年であるから、これによって鯖江藩の士分の全貌が明らかになる筈である。

『御家人帳』には「寛政改」「天保改」「安政改」の三種があり、「寛政改」がその基本となるもので、立藩以来の四百十四家を収録し、「天保改」「安政改」の増補によって前者では五十三家、後者で十三家を追加している。

このほど出版された『鯖江藩御家人帳（上）』は「寛政改」中の百三十家を活字化したもので、これらの家は享保年間までに士分に列した由緒ある家々である。その他の士分三百四十一家は『鯖江藩御家人帳（下）』として目下編集が進行中である。

鯖江藩は江戸中期に成立した五万石の小藩であるが、本書によって短期間に急成長を遂げた家臣団の成立過程が明らかになり、複雑な藩政組織の仕組みを究明することが可能である。また、いま流行のルーツをたどる上でも鯖江市民にとって興味尽きない史料となろう。

難解な古文書の解読と校訂にあたられた関係者の労苦をねぎらうとともに『鯖江藩御家人帳（下）』の完成が一日も早からんことを期待している。また、その下巻には、四百八十家の家別・人名別索引が付せられ検索の便がはかられることをあわせて要望しておきたい。

（A五判　五五八頁　鯖江市役所刊　定価二、〇〇〇円）